文学事典余録

―江口きちのこと―

尾形明子

文学事典の執筆項目にその名がなかったら、知らないままで過したであろう何人もの作家達がいる。著名な作家については、それなりのキャリアを積んだ研究者が執筆するから、私のところにまわってくるのは、たいがいの場合、先行する事典にもでていない埋もれてしまった女性作家たちということになる。引受けはしたものの、いったい何を手掛りに調べたらいいのかと途方にくれる。

期限が迫り、仕方なく文学館や国会図書館に通う日が続き、やがて少しずつ関係資料や作品のコピーを収めたファイルが厚くなり、そしてある日、それまで名前も知らなかったひとりの女性作家の生涯と仕事が、思いがけない程に深く私をとらえていることに気付く。まさに倖わせな出会いである。

が、どれほどファイルが厚くなろうと、私の思い入れが深まろうと、文学事典には字数の制約があり、彼女たちの場合、ほぼ半枚（二百字）と決まっている。近代日本文学史という大きな流れの中で考えるなら、二百字は妥当なスペースなのだろうし、その網の目にかかることさえなかった作家達から見れば、幸運だったともいえる。

二百字に、その生と文学をまとめる。たった一行のコメントに、たったひとつしか記することのできなかった作品名に、私の思いのすべてを托する、と言ってはみるものの、私の中の欲求不満は、それからしばらく続く。学生相手に、身近かな人達に、私はあたかも語り部のように、彼女たちについて語り続ける。語らなくては、せっかく甦ってきた彼女たちが、再び死者となるような、不安と焦りにかられたりする。研究者としての情熱なのか、文学少女の名残りのセンチメンタリズムなのか、おそらくはその双方が渾然として、私の中での彼女たちの息付きは続き、時に私の方向を決めてしまったりもする。

十年前に手がけた「女人芸術」研究はそうした出会いから生れたものだったが、ただそうしたことはきわめて稀で、たいがいは私自身の怠惰とエネルギーの不足から、やがては情熱も弱まって消える。懐しさと、痛みと、後めたさとが、出会った作家の数だけ、私の中に残っていくのだが、二十六年の命のすべてを千余首の歌に托して自ら死んだ江口きちもまたそうした作家のひとりである。

武尊（ほたかね）根は吾が生れどころ小さきいのちいのち終らば眠らむところ

離り来て思へばあはれ武尊なる山辺にいの

ち小さかりけり

大正二年十一月二十三日、群馬県利根郡川場村字谷地に江口きちは生れる。父親は渡世人、母親は村はずれに一杯飲み屋を出し生計をたてていたという。精薄の兄と妹たき。大正九年には川場尋常高等小学校に入学し、昭和三年卒業。五年二月には沼田郵便局に勤務するが、同年六月三日、母ユウの死により退職し、それまでも手伝っていた家業栃木屋を継ぐことになる。生活能力のまるでない父親を含めて一家の生活のすべてが十八歳のきちの肩にかかるのだが、その頃から短歌を作るようになる。昭和六年四月には河井酔茗主宰の「女性時代」誌友となり、昭和十三年の死の朝まで、その生活と感情のすべてが歌となってあふれる。

いとまなき身をもかこたず子のために雛飾りする母なりしかな

あきらめを子にかけて来しその子われは母にやさしき娘ならざり

これの生にいのちを享けしかなしさよ兄の若さのややすぎむとす

行き行きつ眼に迫りくる山ひだについには閉ぢむわれかとぞ思ふ

をさなわれ疲れてあゆむ道の辺にひるがほの花いつも咲きてゐき

家財競売の後いかにしてたつきせむ人のなさけにすがりたき吾は

落葉松は直きいのちに伸び伸びて夕明りする空に寂けし

妹たきを美容師の修業に浅草に出し、父のために風呂桶を買い、日々の様子が歌を通して伝わるのだが、やがて、きちは村の旧家の主人と愛し合うようになる。自らに禁じる程に燃えあがり、苦悩の中できちの心に厭世感と死の思いがひろがる。

相逢へば足らふ思ひを耐へがてに人待ちくらし夜となりにけり

人ひとりおもふはかなし生計をささふるちから疲れ果しぬ

相剋のうらみは告げじあさましと見る人は見よ解きがたければ

人の子がちひさき歎きあめつちにかかはりあらぬ夜は明けにけり

誰がために保ついのちぞ相見じと誓いし面に紅ひくあはれ

夜はせめていましめときて放ちやな紅粉も涙もひとりわがもの

そして十三年十二月二日の未明、きちは、兄を道づれに服毒自殺を計る。苦しい生活の中から一家の墓を建て、父を温泉に送り、すべてを処理しての死だった。辞世二首。

睡たらひて夜は明けにけりうつそみに聴きをさめなる雀鳴き励む

大いなるこの寂けさや天地の時刻あやまたず夜は明けにけり

死の知らせに「女性時代」の島本久恵が通夜に駈けつけ、妹たきから托された歌稿、日記をもとに編纂した「武尊の麓」（昭一四・四婦女界）が、きちの唯一冊の歌集である。後、昭和五十一年に島本久恵は再び「武尊の麓」（清水弘文堂）を出し、かつては触れ得なかったきちの恋愛と、恋人に残した「筐底の歌」を収めている。「露」と題して「君よ／掌を他人に示し給ふな／紫の露と凝りて／わがいのちそこにあれば／消ぬとても君が掌のうち」とあり、「最後の最後まで、あなたの息吹きの中に生きてゐました」と告げる。

きちの姿を伝える資料に小学校時代の友人矢島けいによる「江口きち書簡集」（昭四八・一二　小淵印刷）があるが、冬の一日、武尊の麓を、歩きまわってみたいと今、無しょうに思っている。